

ぐるだいに

発行所／奈良市山陵町一五〇〇 奈良大学社会学部（矢守研究室）

日本グループ・ダイナミックス学会

発行人／杉万俊夫・編集担当／黒川正流

1994年12月1日
第4号

役員改選・理事会おおいに若返る

会長に杉万俊夫氏（京大）を選出

理事の三分の二が交替、学会事務センター併用し
事務局は奈良大へ四月から移行

今年には規定による役員改選年度にあたり、この四月一日に発効した改正会則に基づき役員選挙が行われた。郵便による理事と監査の投票は八月三十一日消印の九月二日配達分まで締め切れられ、選挙管理会（佐藤静一会長）の開票作業を経て四十二回総会で報告承認された。

新しい選挙規定には、①すべての地区の代表を全有権者が投票する従来の方式から、全国区と自地区の代表を投票する方式への変更、②新設された全国区については、連記投票すべき四名のうち二名を四十歳未満の候補者に限定する（当分の間の）暫定規定、などが盛り込まれ、さらに三隅前会長から勇退意思が表明されたことなどから、理事の顔ぶれが大幅に入れ替わり、二十一名中十四名が新顔となった。

なお、会員による会長の直接選挙制度は、候補者となるべき新規定による常任理事（会）が発足してないため、次回選挙から適用される。また地区別学会活動促進を意図して九州地区から分離新設された沖縄地区については投票者がなかったため、選挙が成立しなかった。

役員選挙結果はつぎの通り。（○は当選者、△は次点、氏名下の数値は得票数）

【地区別理事】（当選 九名）

○北海道 有権者36名、投票数17（△、2%）

○大分 有権者14名、△今川民雄

○東北 有権者27名、投票数6（△、2%）

○大渕憲一4、△堀毛一也、△細江達郎

○関東 有権者25名、投票数41（△、6%）

○安藤清志9、○山口 勸6、△村田光二

○中部 有権者87名、投票数26（△、9%）

○長田雅喜13、△内藤哲雄、△奥田秀宇、△吉田俊和

○近畿 有権者22名、投票数48（△、8%）

○金児曉嗣12、○高田利武3、△峰屋良彦、△北山 忍、△白樫三四郎、△高木 修

○中国・四国 有権者68名、投票数14（△、6%）

○黒川正流4、△吉森 護、△田中宏二

○九州 有権者84名、投票数30（△、7%）

○関 文恭6、△鈴木康平

○沖縄 有権者4名、投票数0（不成立）

○全国区理事（当選 十名）

有権者712名、投票数185（26.0%）

（投票は一般二名と若手二名の四名連記制、数値は得票数、一般票+若手票）

○杉万俊夫31+0、○亀田達也1+26、○矢守克也0+22、○浦 光博1+20、○北山 忍4+16、○山岸俊男20+0、○原岡一馬19+0、○渥美公秀0+18、○竹村和久0+18、○村田光二0+18、△池田謙一、△岡本浩一、△高木 修

【監査】（当選 二名）

○古畑和孝、○篠原しのぶ

理事による会長選挙で杉万氏当選

前述の通り、会長選出は今回に限り選挙によって選出された新理事による互選で行われ、投票の結果、杉万俊夫氏（京都大学総合人間学部助教授、43歳）が投票数18票中10票を獲得して当選した。

会長指名理事に鈴木・山本両氏

会則細則第19条三項（C）の規定に基づいて杉万新会長は鈴木康平氏と山本真理子氏を理事に指名し、両氏とも承諾した。

会長は指名理由として、鈴木氏は機関誌「実社心研」の編集業務に深く関わってこれ、今後も重要な役割をお願いする不可欠の方であり、山本氏は中央にあって本学会の渉外業務を担当願うとともに、女性会員の視点を学会運営に反映させる一環としてお願いした、と述べた。

互選による常任理事の選出

会則細則第19条四項の規定により、会長選挙と同時に理事による四名の常任理事の互選が行われ、大分、黒川、山口、矢守の各氏が当選した。さらに会長が理事の中から二名を指名して、今期の常任理事会メンバーがつぎのように決まった。

○杉万俊夫（会長・全国区）、○大分郁夫（北星学園大教授・北海道）、○黒川正流（広島大教授・中国四国）、○鈴木康平（熊本大教授・会長指名）、○山口 勸（東大助教授・関東）、○山本真理子（筑波大助教授・会長指名）、○矢守克也（奈良大助教授・全国区若手）

新執行部の一九九五年度運営方針

実社心研の機能強化と事務の合理化・年会費は一般六千円と学生四千円へ

十月二十二日に九州大学教育学部で行われた日本グループ・ダイナミックス学会第四十二回大会の総会において、杉万新会長は、大会翌日から一九九五年度にまたがるつぎのような学会運営方針(案)を提案し、承認された。ただし、総会出席者(百五十名)が定足数に満たなかったため、仮総会決議となった。会則細則により、決議事項を全会員に通報した後一月以内に会員総数の過半数が文書によって反対しないときは、総会の決議としての効力を発することになる。

一九九四—一九九五年度学会運営方針(案)

一、平成七年度予算について(別掲の予算案を参照)
長年、本学会の事務局は三隅会長のもと、集団力学研究所におかれてきましたが、三隅会長の勇退にともない、事務局を移管することになりました。今後、さまざまな大学で事務局を継承していくこととなりますが、そのためには、煩雑な事務業務(発送業務・名簿管理・会費徴収など)を学会事務センターに移管し、事務局業務の軽減を図ることが必要です。これにともなう、別紙の予算案の通り、百万円強の支出増が見込まれます。そこで、一般会員の会費を現行四千円から六千円に、学生会員の会費を現行三千円から四千円に、それぞれ値上げすることを提案します。

二、名譽会員の推戴条件について

本学会には今まで名譽会員の推戴に関する明確な規定がありませんでした。そこでつぎのような推戴条件を提案します。

◎推戴条件

- ①七十歳以上(当該年度末時点で)
- ②会長を二期以上または理事を四期以上かつ

または学会活動に著しい貢献のあった者を、理事会が推戴し、総会に諮る。

三、学会運営体制について

◎常任理事の役割分担

- ①和文誌 鈴木・山口・矢守
- ②英文誌 杉万・鈴木・(および常任理事から、山岸・北山・渥美の3氏)
- ③渉外 黒川・山本
- ④ニュースレター 大坊

◎発送業務・名簿管理・会費徴収などに関わる事務業務
平成七年四月一日を期して学会事務センターに委託する。

◎機関誌編集に関わる事務業務

平成七年四月一日より奈良大学(矢守)で行う。新事務局での電話受付は週二日となる予定です。あとは、FAX、留守電、パソコン通信でカバーします。

四、「実験社会心理学研究」編集方針・編集体制について

【和文誌】

★理念 和文誌の目的は、国内研究の醸成・活性化である(それに対して、英文誌の理想は、質の高い業績を国際的に問うことである)。したがって、和文誌の審査の基本方針として、欠点を指摘してリジェクトするのではなく、小さくてもいいからコントリビューションがあれば、それがクローズアップされるよう加筆・修正(論文の大幅圧縮、資料論文への変更等を含む)の後、アクセプトする。もちろん、ノー・コントリビューションであればリジェクトする。

この基本方針に基づき、次の三つの具体策を提案する。

- (1)最初の審査結果通知を、投稿後三ヶ月以内に行うことの厳守、および、審査完了論文の速やかな公開

(2) 主査・副査の導入

(3) 内容編成の多様化
この三点を以下に具体的に説明する。

(1) について

・最初の審査結果通知を、投稿後三ヶ月以内に行う。なお、最初の審査結果通知までに要した期間に関する統計データをニュースレターに掲載する。

・審査完了論文は、できるだけ早く公開する。そのため、一号あたりの掲載論文数も、三・四論文増やす。そのための予算措置(現印刷所の試算によれば、印刷費は、1ページ増あたり約1万円増として、①機関誌印刷費用を昨年より、約三十万円アップ、②「学会集報」のニュースレターへの移動、③フロッピー入稿の導入(印刷費が約十万円ダウン)を講じる。また、これにともなう「号」(「巻」ではない)による厚さのバラツキが生じるが、これはやむを得ない。

(2) について

◎論文審査の手順
①受稿後、速やかに、常任編集委員会で、主査一名(主として、理事)を決定。このとき、最初の審査結果の通知を三ヶ月以内に完了しうるかを主査(候補者)に打診し、「ノー」であれば、他の人をあたる。

②主査は、副査二人を、速やかに指名。副査は、理事に限定しない(必要であれば、非会員も)。

③主査は、自分の審査、および、副査二人の審査を、自らの責任において、一ヶ月以内に完了させる。

④主査は、一ヶ月間で、副査の審査結果を参考にしながら「総合コメント」を作成。従来の1・7点の評点は、「総合コメント」に主査が付記する。

⑤「総合コメント」および、副査の審査結果コピーを投稿者に送付。

⑥常任編集委員会は、①⑤のプロセスに対して、全般的に責任を負う。

◎主査からの総合コメントに異議がある場合には、投稿者は常任編集委員会に、

直接異議を主張することができる。

(3) について

◎従来の原著、資料、展望、書評以外にも、国内外の最新研究の紹介・抄訳、会員間のダイアログなどをも盛り込み、多様化を図る。

◎「特集号」(従来方式の)について。「特集号」は廃止する。ただし「特集」は、残す。「特集」は、随時組むことにする。英文号の「特集」もありうる。

「特集」は、一つの明確な方向性をもつ、読みごたえのある三・四論文で構成する。執筆者は、会員に限定しない。また「特集」のテーマは、広く会員に公募し、常任編集委員会において検討する。ただし、「特集」によって、一般論文の掲載遅滞が発生することは避ける。

★なお、「編集委員長」会長、常任編集委員、常任理事、編集委員「理事」体制とする。すなわち、理事会と別個に編集委員会を設置することはない。

★「掲載論文の質を向上させるために、非会員からの投稿を受けつける」という案もありうるが、それについては、常任編集委員会で検討する。

【英文誌】

◎短期対策

・英文誌の性格を踏まえ、投稿者は会員に限定しない。国際的に広く投稿を募る。・英文の特集を組むこともありうる。・海外に広く広告する。(PRモニターなどにも)。現在は、JGAP、ESR。

・英訳・英文校閲を依頼できる人物(機関)を、常任編集委員会が幹旋する。

◎長期構想

・アジア、環太平洋の国際的研究者ネットワークとの連携を模索する。・国際的販路をもつ出版社から出版する方途を探る。

五、ニュースレターについて

年二回十の発行を目指す。現在、機関誌に掲載されている「集報」は、ニュースレターに組み込む。

日本グループ・ダイナミックス学会1995年度予算(案)

収入 項 目	予算額	支出 項 目	予算額		
1. 会費	5,700,000	1. 機関誌印刷経費	3,935,000	3. 学会賞関係	100,000
(1)会員年度会費	(3,900,000)	(1)機関誌印刷費	(2,600,000)	4. 地域別合評会	50,000
@6,000×600(人)		(2)英文校閲料	(300,000)	5. 諸学会連絡費	100,000
@4,000×75(人)		* (3)機関誌送付業務	(150,000)	6. 大会助成金	200,000
(2)雑誌定期購読	(1,800,000)	@200×750(人)		7. 事務費	1,415,000
2. 分冊売上	300,000	(4)機関誌送付料	(165,000)	* (1)会員管理費	(100,000)
3. 文部省科研費補助金	500,000	@60×3(冊)×750(人)		* (2)会費徴収費	(315,000)
4. 広告収入	300,000	(5)編集業務通信費	(600,000)	@420×750(人)	
5. 雑収入	165,000	(電話費/郵送料)		* (3)会員異動処理費	(100,000)
(1)利息	(10,000)	(6)抜刷	(150,000)	(新入会員/住所所属変更/追加発送)	
(2)抜刷	(150,000)	2. ニュースレター	317,500	* (4)庶務業務委託費	(240,000)
合 計	6,960,000	(1)印刷費	(100,000)	@20,000×12(月)	
		@50,000×2(回)		* (5)送付ラベル出力費	(60,000)
		* (2)送付業務	(97,500)	(6)人件費	(600,000)
		@130×750(人)		@5,000×10(日)×12(月)	
		(3)送料	(120,000)	8. 理事会費	(500,000)
		@80×2(回)×750(人)		9. 予備費	(22,500)
				10. 雑費	(20,000)
				11. 名簿作成・理事選挙費用	(300,000)
				合 計	6,960,000

1. *印は、学会事務センターへの支払い(計 ¥1,062,500)。

2. 会費値上げ額(一般:¥2,000、学生:¥1,000)の算定根拠。会員総数750人。会費納入率を90%とすると、会費納入会員は675人。うち、600人を一般会員、75人を学生会員と考える。学生会員に対する値上げ転嫁分を一般会員の1/2とすると、事務業務の事務センター委託に伴う支出増(¥1,062,500)を、637.5人(=600+75/2)で負担することになる。

この結果は、¥1,062,500÷637.5=¥1,666となる。

3. 支出1-(5)項の算出根拠。昨年実績で、編集業務に関わる郵送料は約¥3,000,000。さらに、新編集事務局に開設する電話の費用が¥240,000(¥20,000×12月)。これに、新編集体制への移行にともなう増分を見込んだ。

4. 支出8項の算出根拠。主として、常任理事会開催のための旅費。常任理事が全国に分散することになったため、日常のコミュニケーションは各種メディアに依存することになる。しかし、少なくとも学会時以外に、年間3回の会合を関西地区で開催するとして、北海道(¥57,000×3回)、東京(¥26,000×2人×3回)、熊本(¥28,000×3回)、広島(¥12,000×3回)の合計が、¥447,000となる。

5. 支出7-(5)項について。地域別合評会等を案内する際の宛名ラベルを事務センターに要求する際の費用。

6. 支出7-(6)項について。新編集事務局の事務バイト(週2日を予定)に対する謝金。

7. 学会事務局を集団力学研究所から、学会事務センター(名簿管理/会費徴収)、および奈良大学(雑誌編集)に移管することによる初期投資について。このために、約¥35万が必要となり、これには「基本積立金(現在¥48万)」の一部を充てる。

事務センターへの委託については、上記*印の定常予算以外に、事務センターの見積りによれば、契約金として¥6万、名簿引継費(@400×750(人)=¥30万)が必要。後者については、名簿のFD引継ぎを行えば約半額になる見通し。現在、黒川常任理事を中心にそのための作業中。よって、来年度当初に、約¥20万が必要。また、奈良大学の編集事務局開設にあたって、電話回線1本の契約(約¥8万)と電話機(FAX、留守電付き:約¥5万)が必要。

第四十三回大会(一九九五年度)は
晩秋の学習院大学で
平成七年度の本学会大会は、十一月二十五(土)、二十六(日)の両日、山手線内側唯一の紅葉の地、豊島区目黒の学習院大学(中村陽吉大会委員長)で行われることに決定した。

論文英訳者の斡旋について

「実験社会心理学研究」英文号は、日本における優れた研究を諸外国に紹介することを主要な目的の一つにしています。しかし、多くの日本人研究者にとって言語の壁は厚く、英訳には、ネイティブ・スピーカー、あるいは、それに準じる日本人の力に頼らざるを得ないのが実状です。編集委員会では、このような事情に鑑み、英訳のための協力者を斡旋するよう努力します。ただし、翻訳・校閲料は自己負担です。英文で発表したいにもかかわらず、身近に適切な翻訳・校閲者が見つからない方は、どうぞ編集委員会までご相談下さい。

実社会心研「特集」の企画募集

実験社会心理学研究は、これまで、各巻二巻を「特集号」とし、編集委員会において、そのテーマを決定してまいりました。しかし、この度、本ニュースレター紙上でも報告されています通り、「特集」については、そのテーマ(企画)を広く会員に募集することになりました。応募いただいた企画は、編集委員会において検討され、採択された企画は、その応募者を「特集企画者」とする「特集」として、公刊されます。

「特集」のテーマ(企画)については、アイデアをお持ちの方は、「特集」のテーマ、ねらい(概要)、企画者の氏名、所属をA4の用紙2-3枚(フリー・フォーマット)にまとめ、実験社会心理学研究編集事務局宛、お送り下さい。平成七年三月末日締切といたします。

「松明」は新世代に手渡された

「老兵は消えず」、覚悟を新たに 前会長 三隅 二不二

このたび日本グループ・ダイナミックス学会（以下GDと略称）は学会役員選出の方法を革新し、それによって理事等の選挙を行った。その結果として革新的な変化が生じた。ある人は「革命的な変化」と言ったが、しかし「革命」ではない。若年層が反逆して従来の支配的層の権力を奪取したのではないからである。従来のGD学会の役員達が自ら学会の自己改革案を創り出し、それを実施したまでである。総会の合意の下に静かな変革を遂行したのであるから、変革ではあるが、革命ではない。明治維新にむしろ類似したものである。日本社会の近代化の過程で生じた多くの変革はそのようにして生じたのであるから日本の伝統に従っているといえる。

ともあれ「松明」は新しい世代に静かに渡されたのである。しかしグループ・ダイナミックスの研究で明らかになように、

「実社心研」充実で国内研究醸成を

就任「あいさつ」 会長 杉万俊夫

このたび会長という大役を仰せつかりました。日本グループ・ダイナミックス学会の発足は一九四九年……私が生まれた年とはほぼ同じです。したがって、発足当時のことは、諸先輩の思い出話で推測することしかできません。当時は、会員数も少なかったのですが、合宿形式で大会を開き、夜を徹して議論されたそうです。機関誌発行については、ニューズレター「さいころじすと」（1983 No. 11）に掲載された初代会長牛島義友先生の文章「我が道」で知ることができました。「……研究活動は研究論文を生み出

いかなる良い変革も、変革それ自体には何らかの心的抵抗が生じる。何らかの社会的緊張・ストレスが生じる。この緊張は建設的方向へ向かえば、学会の創造的活性化へ導かれよう。そう願いたい！

しかし、学問の発展のためには、特に人文・社会科学の分野においては、その学問の担い手が若ければ若いほど良いとは言えない。筆者がまだ若かりし頃、我が師である矢田部達郎先生が「三隅君、学問は経験だよ」と言われたことを想い出す。カントもマルクスも彼等が体系化を行った年齢は六十歳台と記憶している。今の時点で換算すれば七十歳かそれ以上であろう。

日本GD学会は一九四九年、日本列島の一地方で設立された。東京から離れた九州の一点で、日本グループ・ダイナミックス学会を設立したために、いわゆる中央（東京）からさまざまな抵抗もあった。

することが必要であり、その論文を読むこととで追試することができ、また、その結果の上に乗って研究を進めていくことができる。したがって、論文発表の機会をこしらえてやるのが研究指導者としては大切な仕事であろう。このためには、自分の大学なり研究所が編集指導性をもった学術雑誌を持つことが有効である。私は九州大学の教育心理学の責任を持つた時に、研究者の養成のために学術雑誌を持ちたいと考え、苦心の結果、はじめ「教育社会心理学研究」の名の研究誌を創り、これがグループ・ダイナミックス学会の創立にもつながり、今日「実社心研」……ちなみに、本学会発足当時、他にあった心理学関係の学会は、日本心理学会、日本教育心理学会だけであつた。

た。その後数年を経過して、日本社会心理学会が東京に生まれたが、日本GD学会の一つの影響として解釈する意見もある。しかし、この分野の発展のためにはよい傾向であろう。

今年度クルト・レヴィン賞と第一回国際応用心理学賞を拝受したが、これは筆者一人に対するというよりも、日本の研究に対する国際賞である。この国際化時代には国内における中央も地方もないのである。そして、日本GDの研究は世界のトップレベルにあることを自覚していただきたい。グループ・ダイナミックスをまとめたカトリック教授も、アメリカ合衆国ではすぐテーマを変えたが、日本はそれが少ない。よい傾向であると評価されたことを想い出す。われわれは、現在の世界の人類が直面する多くの人間関係、集団・組織の諸問題を自分のテーマとして、世界の人のために研究する姿勢を示して貰いたい。これを遺言として「老兵はただ消え去るのみ」と述べたいところだが、まだ頑張りねばと覚悟を新たにしている次第である。

と聞いています。

その後、ご承知のように、三隅二不二先生の強力なリーダーシップのもと、本学会は着実に会員数を増し、全国学会として発展するとともに、「実社心研」も充実の一途をたどりました。私が学部2年生のころだったでしょうか、「実社心研」創刊号（「教社心研」からの通算十一巻一号）を三隅先生がゼミで紹介され、その意義について熱くお話しになったのを覚えています。しかし、そのような「実社心研」の刊行をはじめとする学会の運営は、決して容易なことではなかったようです。やはり、私が学部生だったころ研究室に立ち寄り、助手の先生方が四六時中、印刷機を回して作っていた「教社心研」の複製版を手作りで制作、販売し、学会の財政を助けていたのです。

これは、私がかいま見た当時の九大関係者のご苦労の一端に過ぎません。

一九七八年から本学会の事務局は、集団力学研究所に移りました。当研究所は三隅先生を所長とする、学会と産業界のインターフェイスとも言えるユニークな研究所ですが、その少人数による激務の中であって、本学会の事務業務は、三角恵美子さん、高崎栄子さんの、まさに夜なべ仕事によって担われ今日に至りました。

以上、話が事務局に偏ってしまいました。が、学会運営のなかめである常任理事としては、松村康平、廣田君美、中村陽吉、岡村二郎、安藤延男、木下富雄、原岡一馬、狩野素明、鈴木康平、佐藤静一、白樫三郎、黒川正流の先生方が、長年にわたり、かつ、貴重な時間をさいて学会運営に尽力されてこられました。

このような多くの方々の献身的努力に支えられてきた本学会の歴史を思うとき、新会長として身の引き締まる緊張感を覚えずにはいられません。どんなことがあっても、いままで安定的に行われてきた通常業務や機関誌刊行に支障をきたすようなことは許されません。学会事務センターへの事務業務移管を含めて、新しい事務局体制の確立を急ぎます。その上で、幸い多くの投稿論文を抱えるようになった「実社心研」をさらに充実させ、国内研究の醸成の場として一層発展させたいと思います。そして、英文誌。アジア、オセアニアなど環太平洋地域にできつつある社会心理学者のネットワークとも連携しながら、欧米のジャーナルとはまた特色を異にするインターナショナル・ジャーナルにすることを目標に全力を投入する所存です。

理事の先生方はもとより、広く会員の方々のご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

大会開催報告

第四十二回大会副委員長 狩野素朗

本学会第四十二回大会は、十月二十二日（土）二十三日（日）の両日、九州大学教育学部において、約二百三十名の参加者を迎えて開催された。

大会前日の二十一日（金）午後一時より、西鉄グランドホテルにおいて、研究奨励賞選考委員会、理事会、編集委員会が開催された。

翌二十二日、文科系学部講義棟を発表会場として、ショートスピーチセッション五部門二十九題、ロングスピーチセッション五題が発表された。

ついで昼食を兼ねて、学会総会が大講義室において開催された。議長に三隅不二大会委員長を選出し、報告・審議がなされた。三隅会長が本大会限りで勇退され、昨年度改正された役員選挙規定により選出された杉万俊夫会長に引きつがれることとなった。昭和二十四年本学会の設立以来、約半世紀にわたって、三隅会長が学会の発展に尽くされた功績がきわめて大きかったことについては言うまでもないことである。さらに、三隅会長より、レヴィン賞の副賞千ドルに、会長のポケットマネーを加えた、百万円を学会に寄付したいとの申し出がありこれを基金として三隅賞（仮称）を設置することとなった。

午後は、西オーストラリア大学副学長 R・ウッド博士による「GTEcheg」を中心とした行動変容」と題する特別講演がなされた。ついで「学校適応とグループ・ダイナミックス」をテーマに公開シンポジウムが行われた。一般市民、教育関係者も参加され白熱した議論がなされた。

シンポジウム終了後、学内生協食堂で懇親会を開いた。百四十名をこえる参加があり、懇親の輪が盛り上がり会場が狭く感じられた。

第二日目は、午前中ショートスピーチセッション四部門二十四題、ロングスピーチセッション三題が発表された。午後には、パネルセッション四十三題の発表、ワークショップ「こころの集団性」が行われた。パネルセッション、ワークショップとも広い会場を準備したつもりであったが、予想をこえる参加者で窮屈な思いをされたことをお詫びしたい。

福岡市は、湯水で不自由、不便をおかけすることを懸念したが、会員各位の積極的なご参加により、滞りなく盛会のうちに、大会を終えることができたことを準備委員として、ここからお礼を述べたい。

あらためて、この大会に参加された会員各位、大会の賛助を頂いた各機関、企業にここからお礼を申し上げる。

三隅前会長・レヴィン賞受賞記念に

GD学会賞基金に百万円を寄付

本年度の第一回国際応用心理学会賞受賞に引き続きクルト・レヴィン賞を受賞された三隅前会長から、本学会会員の卓越した研究業績を顕彰するための基金として百万円の寄付の申し出があり、これをお受けすることが四十二回大会総会で報告了承された。

レヴィン賞の賞金額は千ドル（約十万円）であるが、これに三隅氏の私費九十万円を加えて寄付されたものであり、理事会では三隅賞（仮称）新設の方向で具体的な基金運営方針の検討をはじめた。

第七回研究奨励賞は神 信人他に決まる

十月二十一日に開催された日本GD学会研究奨励賞選考委員会（末永俊郎委員長他十名）は、第七回受賞論文神信人・関谷直保子・篠塚寛美著「ネットワーク型四人のジレンマの実験的研究：PD関係におけるコミットメントの形成」（実社心研三三巻一号）を選定した。二十二日の総会の席で表彰が行われた。

日本グループ・ダイナミクス学会1993年度決算報告（案） 平成5年4月1日～平成6年3月31日

（単位：円）

収入			支出		
項 目	予 算 額	決 算 額	項 目	予 算 額	決 算 額
1. 会費	4,640,000	4,682,000	1. 機関誌印刷経費	3,270,000	3,420,371
(1)年度会費	(2,700,000)	(2,881,000)	(1)機関誌印刷費	(2,180,000)	(2,439,143)
(2)賛助会費	(140,000)	(0)	(2)編集・翻訳料	(540,000)	(243,660)
(3)定期購読	(1,800,000)	(1,801,800)	(3)送料	(400,000)	(415,982)
2. 分冊売上	370,000	749,825	2. ニュースレター作成費	300,000	273,166
3. 文部省科学研究費補助金	330,000	330,000	3. 学会賞関係費	100,000	50,257
4. 広告収入	300,000	135,000	4. 地域別合評会	50,000	12,998
(1)機関誌等広告		(45,000)	5. 通信・交通費	200,000	70,043
(2)ニュースレター		(90,000)	6. 諸学会連絡費	100,000	90,542
5. 雑収入	230,000	334,174	7. 大会助成金	200,000	200,000
(1)利息	(30,000)	(12,588)	8. 人件費	350,000	312,120
(2)抜き刷り	(150,000)	(321,586)	9. 事務費	510,000	501,147
(3)版下、その他	(50,000)	(0)	(1)事務所借室料	(360,000)	(360,000)
6. 大会論文集		131,700	(2)事務雑費	(150,000)	(141,147)
7. 前年度繰越金		29,545	10. 理事会費	450,000	360,700
合 計	5,870,000	6,393,044	11. 予備費	20,000	0
特別会計			12. 雑費	20,000	53,860
特別出版基金 967,208円（内・平成5年度利息 32,594円）			13. 名簿作成・理事選挙費	500,000	500,000
基本積立金 476,814円（内・平成5年度利息 5,608円）			小 計		5,845,204
			次年度 繰越金		547,840
			合 計	5,870,000	6,393,044

会計監査報告：監査の結果正確妥当であると認める。

監査 篠原しのぶ 印
関 文恭 印

日本グループ・ダイナミックス学会
1994年度(1994/4/1~1995/3/31)予算(案)

収 入	単位:円
1. 会費	4,780,000
(1)年度会費	(2,840,000)
(2)賛助会費	(140,000)
(3)定期購読	(1,800,000)
2. 分冊売上	250,000
3. 文部省科学研究費補助金	390,000
4. 広告収入	280,000
5. 雑収入	380,000
(1)利息	(30,000)
(2)抜刷	(300,000)
(3)版下、その他	(50,000)
6. 名簿作成・理事選挙準備	
積立金より繰入	500,000
合 計	6,580,000

支 出	単位:円
1. 機関誌印刷経費	3,515,000
(1)機関誌印刷費	(2,230,000)
(2)編集・翻訳料	(500,000)
(3)送料	(435,000)
2. ニュースレター作成費	300,000
3. 学会賞関係費	100,000
4. 地域別合評会	60,000
5. 通信・交通費	200,000
6. 諸学会連絡費	150,000
7. 大会助成金	200,000
8. 人件費	300,000
9. 事務費	500,000
(1)事務所借室料	(360,000)
(2)事務雑費	(140,000)
10. 理事会費	450,000
11. 予備費	30,000
12. 雑費	25,000
13. 名簿作成・理事選挙費	750,000
合 計	6,580,000

日本グループ・ダイナミックス学会
第41回大会 決算報告書(1994/10/22) 単位:円

収 入		
参加費	204名	942,500
正会員予約参加	4,500×137名	(616,500)
当日参加	5,000×47名	(235,000)
臨時会員	5,000×17名	(85,000)
学生会員	2,000×3名	(6,000)
論文集	215冊	990,000
論文掲載料	4,500×107冊	(481,500)
予約購入	4,500×63冊	(283,500)
当日購入	5,000×45冊	(225,000)
懇親会	136名	548,500
正会員予約参加	4,000×65名	(260,000)
学生会員予約参加	3,000×12名	(36,000)
正会員当日参加	4,500×46名	(207,000)
学生会員当日参加	3,500×13名	(45,500)
大会補助・広告料等		530,000
G D学会本部補助		(200,000)
広告・賛助費		(330,000)
収入合計		3,011,000
支 出		
印刷費(通信・論文集他)		1,052,419
郵送料		264,942
教室使用料等		35,788
係員経費(アルバイト賃金)		401,200
懇親会関係費		640,540
理事会関係費		36,000
総会昼食代・休憩室接待費		252,338
予約金返却・送料		103,132
G D学会本部へ寄付		100,000
雑費		124,641
支出合計		3,011,000

第41回大会委員長 鈴木康平 印

平成六年度 第四回常任理事会報告
平成六年九月三日(土) 十四時三十分
於・(財)集団力学研究所会議室
出席者(会長)三隅二不二、(副会長)
狩野素朗、(理事)安藤延男、原岡一馬、
黒川正流、鈴木康平、(事務局)三角恵
美子
○報告事項
一 機関誌印刷の件
実験社会心理学研究三十四巻一号は九
月七日に刊行する予定。
二 役員選挙結果について(別紙資料)
佐藤選挙管理会長より別紙の通り選挙

結果が報告された。
三 第四十二回大会開催準備の進行状況
が狩野準備副委員長から報告された。
四 その他
①日本学術会議「女性科学研究者の環境
改善の緊急性についての提言」、②日本
学術会議「第十六期日本学術会員として
推薦すべき者」、③「日本学術会議だよ
り」第八十四号、④全心協ニュース六号、
⑤「臨床心理技術者の国家資格制度創設
に関する要望書」、の各文書を受領した。
○審議事項
一 会員四名の入会を了承した。
二 寄付の申し出について

第四十一回学会大会主催校(熊本大学
鈴木康平大会委員長)より、十万円の
寄付の申し出があり了承した。
三 学会名簿作成について
黒川理事が中心になり作成する。
四 三隅賞について(別添資料)
三隅会長からレヴィン賞受賞記念とし
ての百万円の寄付とその運営方法に関
する提案があり、賛同、了承した。

関連諸学会の一九九五年度大会予定
◎日本発達心理学会・三月二十八日
〜三十日(火水木)・同志社大学
◎日本交通心理学会・四月二十二日
〜二十三日(土日)・早稲田大学
◎産業・組織心理学会・十一月十一日
九月十五日〜十六日(祝土)
・エル大阪(大阪大学主催)
◎日本社会心理学会・三六回大会・
九月二十三日〜二十四日(祝日)
・成城大学
◎日本教育心理学会・三七回大会・
九月二十八日〜三十日(木金土)
・茨城大学
◎日本心理学会・五九回大会・十月十
日〜十三日(水木金)・琉球大学
◎日本グループ・ダイナミックス学
会・四三回大会・十一月二十三日
〜二十四日(祝金)・学習院大学

授賞演説 B・レイヴン

一九九四年度 クルト・レイヴン記念賞

心理学および社会心理学に対するクルト・レイヴンの影響の歴史を顧みると、彼と日本の同僚たちとの関係性がとりわけ興味深い。ベルリンにおけるレイヴン門下生のほとんどはドイツと東欧出身であった。一つの例外は日本の若い学徒、佐久間鼎であった。一九二〇年代初め、レイヴンが対人関係や集団行動に関心を抱きはじめる前に、佐久間鼎はゲシュタルトと場の理論に従って知覚と認知の過程の研究をレイヴンとともにに行い、後に日本に戻って日本心理学の重要な人物となった。レイヴンは一九三二年にスタンフォード大学での学業を終えて、日本經由でベルリンに戻る際に友人や以前の弟子たちを訪ねることができた。彼がドイツの選挙でナチスの勝利を耳にしたのは日本に滞在中のことであった。彼は夫人にドイツを離れるよう電報を打つ一方、移住について合衆国の同僚たちにコンタクトした。その途中、レイヴンは佐久間教授と場の理論の対人行動への彼の最新の拡張について議論する機会をもった。つづく数年間はレイヴンと佐久間のコミュニケーションが続いたが、三十年代の進行につれて徐々に困難になり、第二次大戦がその機会を完全に崩壊させた。戦争が終わってすぐレイヴンは佐久間教授に手紙を書き、アメリカのレイヴン主義者グループの研究の最新動向を述べ、その中でも集団決定の研究と今や古典となったレイヴン、リビット、ホワイットの民主的、専制的、自由放任的リーダーシップの研究を述べて佐久間に交差文化的追試を示唆した。佐久間はこの手紙を感激とともに彼の若い弟子である三隅二不二に見せた。権威主義的リーダーシップスタイルにより適するようにみえる文化の日本で、類似の結果が得られるかどうかの問題であった。三隅教授はレイヴン、

リビット、ホワイットの結果と驚くほど類似した結果を示した自分の研究を説明するであろう。ひよっとすると強制性勢力をともしなう日本の権威主義の表面に見えるものは、リーダーとフォロワーの間の相互的責務を意味する正当性勢力の真に可能な形式、つまり、日本人が「恩」と称するものから生じる極度に正当性をもつ勢力についてのルース・ベネディクトの観察と一貫するような形態なのであるうか。おそらく、パフォーマンズと集団維持の両方へのリーダーの強調が日本の最大の効果性をもたらす、という合衆国の知見とは矛盾する三隅の知見をも説明できるのは、相互的責務の正当性勢力に対するこの強調であろう。

いずれにせよ、これらの経験は三隅教授に非常に影響した。彼はリーダーシップに関心をもちはじめ、彼のPM (Performance / Maintenance) 理論を展開したが、この理論は日本の多くの学徒たちの研究を方向づけ、また組織心理学への応用に極めて重要なインパクトを与えた。三隅と共同者たちはまたレイヴンとその仲間たちの集団討議、集団決定の研究を発展させ、これらの効果が個人の集団行動を変容させるものとして応用した。そのような手続きが横浜(福岡?)のバス会社や長崎の造船所での事故率の低減に果たした劇的な効果を彼は語るであろう。事実、集団決定研究は合衆国より日本の方で効果的である。おそらく日本文化のもう一つ反映であろう。三隅二不二と同僚たちの努力の結果として、レイヴンがそもそも育てた形式に最も近似したやり方のグループ・ダイナミックスをいま見ることができるとは日本においてなのだと言った方が公正であろう。彼は日本の社会心理学のほとんどが加盟している日本グループ・ダイナミックス学会の設立への貢献と高度に成功的な集団力学研究所の設立について名誉を称えられている。彼の努力に対して、三隅二不二は最近の国際応用心理学大会からの貢献賞を含む、

広範な承認と榮譽を受けている。一九八九年には「輝かしい学問業績と日本文化の進歩に対する偉大な貢献」を成した学者に天皇が毎年与える「紫綬褒賞」を受けた。これら多数の表彰に対して、SPSSIは喜んでもう一つの権威ある賞、心理学研究と社会活動の発展と統合に対する卓越した貢献に贈られるクルト・レイヴン記念賞を贈呈する。

三隅教授先生、われわれの領域と学会への貴下の格調高い業績に、われわれの敬意と不朽の感謝の念を捧げます。

1994 August 1,
三隅二不二博士殿

三隅先生レイヴン賞授賞式同行記

熊本大学 吉田道雄

クルト・レイヴン記念賞の授賞式は、一九九四年八月十三日土曜日十五時から、ロサンゼルスウェスティン・ボナベンチャー・ホテルで行われた。チェアマンであるUCLAのバートラム・レイヴン博士が三隅先生の業績を紹介し、賞状と記念品が贈呈された。受賞記念講演の演題は「Development of Group Dynamics in Japan and Leadership PM theory」である。

三隅先生は淡々と、しかしきわめて自信に満ちた態度で、自らの研究について語られた。講演終了後は質問がつづき、予定された時間をオーバーするほどであった。質問者の中には、スタンフォード大学のDr. Zimbardoもいた。Dr. Raven、先生の永年の友人である、Dr. Kelley夫妻、そして……、おそらくそのほかにもすい人々が参加していたに違いない。私は思わず「これはすごい機会なんだ」と心の中で叫んでしまった。

さて、その日の夕刻にはケリー夫妻による祝賀会が行われ、三隅先生をはじめ、われわれ同行者全員がご招待を受けた。会場は授賞式とおなじボナベンチャー・ホテル最上階の「トップ・オブ・ファイブ」、きらめくロスの夜景が一望できる

すばらしいレストランであった。ここには、帰属理論のDr. Weiner夫妻も参加、ケリー教授は、三隅先生との交友にまつわる楽しいエピソードを実に懐かしそうに語られた。また、偶然近くの席に学習心理学の大御所ヒルガード博士がおり、ケリー先生の紹介であいさつを交わすなど、三隅先生も大変なご機嫌であった。同行したわれわれにも、心に残る機会になったことはいうまでもない。こうして記念すべき授賞式の夜は更けていった。

翌十四日の日曜日には、三隅先生主催の受賞記念パーティが行われた。会場はニュー・オオタニ、学会会場と離れているため、ご招待した方々がちゃんと来てくれるだろうかとの杞憂もはずれ、多くの人々が集まり、大盛会となった。参加者全員が三隅先生の受賞を祝し、研究の話に花を咲かせた。日系のホテルで、和食をベースにした料理であったが、ケリー先生が、そこになかった、「beef」をご希望になった。さっそくホテルマンに注文すると、兵庫県産の「地酒」ができたのには驚いた。こうして、今回の最大のハイライトである授賞式と記念講演、そして記念パーティと、二日にわたるスケジュールは無事に終了した。

~~~~~ ☆各地の研究会だより: (一) ☆ ◆第九回関西フォーラム 報告 ◆

・五月二十一日神戸大学文学部で開催。今回はミシガン大学集団力学研究所からユージン・バーンシュタイン教授をお迎えし、「Cooperation, altruism, and evolutionary theory: An example of current research in group dynamics」と題して、アメリカにおける集団研究の現状、および先生ご自身の最新研究の一つについて講演していただいた。

(神戸大学渥美公秀氏から、当日のフォーラムの講演内容と質疑応答の概要が編集部に届いています。紙幅の都合で掲載割愛しますが、希望者は直接渥美氏078-803-0755へ資料請求してください。)



## ☆各地の研究会だより・・・(二) ☆

◆一九九四年度名古屋社会心理学研究会◆  
(11/24現在)会場：名古屋大学教育学部

○第一回 五月七日(土)

発表者：堀内 孝氏(名古屋大学教育学研究科)「自己関連づけ効果の生起メカニズムに関する研究—自己の認知次元に準拠した多次元意味処理—」

自己関連づけ効果の生起メカニズムとして、自己の認知次元に準拠した多次元的意味処理を仮定し、これを検証するための一連の実験結果を報告いただいた。

○第二回 七月九日(土)

実社会心研合評会・対象論文：Takai, J. &amp; Ota, H. (1994) "Assessing Japanese Interpersonal Communication Competence", JJPSP, 33(3), 224-236.

報告者：高井次郎氏(名古屋市立大学)実社会心研三十三巻掲載の原著論文を中心に、文化的要因を考慮した対人コンピテンス研究について報告をお願いした。

○第三回 九月二十四日(土)

発表者：大平英樹氏(東海女子大学)

「対人認知と瞬目」

情報処理過程の指標として瞬目を用いた対人認知研究の可能性について、抑うつ傾向者の自己照合情報処理を扱った研究を始めとするいくつかの実験データをもとにご発表いただいた。

○第四回 十二月十日(土)

第四回は田中堅一郎氏(常葉学園浜松大学)をお迎えし、社会心理学における文化的要因についてお話いただく予定である。(森 久美子・記)

## ◆奈良大「社会心理学レクチャーズ」◆

奈良大学社会学部では昨年度来、内外の研究者を招いて最先端の研究を学生や院生向きに解説してもらう講演シリーズを開催している。本年度はすでに①ハワイ大学 E.Hatfield 氏、②ミシガン大学 E.Burnstein 氏、③東京女子大・安藤清志氏、④東大・山口 勲氏の講演が好評

裡に行われた。

第五回は十二月六日(火)十六時二十分から広島大学浦光博氏による「現代社会とソーシャル・サポート—支えあいの社会心理学—」の演題で開催される。問い合わせは奈良大学社会学部矢守まは高田(電・0742-44-1251)まで。

## ◆九四年度広島実験社会心理学合評会◆

本年度の広島大学実験社会心理学研究合評会はつぎの通り実施中である。

於・広島大学総合科学部A二〇八室

○四月三十日・「バーンシュタイン博士夫妻を囲む小講演とミニ・パーティ」

○五月二十八日・発表者 福永弘樹・立元 真 他誌論文

○六月十八日・発表者 松田大治・加来慎也 他誌論文

○七月二日・特別企画 「リスク・コミュニケーション」

話題提供者 摂南大学・木下富雄氏

○十一月二十六日・発表者 神蘭紀幸

奥田秀宇「恋愛関係における社会的交換過程—公平、投資、および互恵モデルの検討—」実社会心研、1994、34(1)、83-91.

・発表者：木村巖弘 他誌論文

※広島大学実社会心研合評会では、広島に限らず中四国・九州方面からの参加者を歓迎致します。参加希望者には案内状を送付致しますので、黒川(0824-24-6576)または坂田(0824-24-6578)まで御一報ください。

## ◆京大社会心理学コロキウム◆

社会心理学とその隣接領域の先生方による講演会「コロキウム」は、最新研究に基づくアイデアや理論を共に聴き討論する場として昨年度から発足した。原則として金曜日午後三時から約九十分、京大総合人間学部A三三六室で開催されている。今年度後期は、十月七日 Bernard Guerin (The University of Waikato) 十月二十八日京大総合人間学部・北山

忍、十一月八日東工大・橋爪大三郎、十一月十二日百合女子大・東 洋および Anne Fernad (Stanford University) 十一月二十二日東大・山口 勲、の各氏が講演した。

今後は、十二月二日京大防災研・林春男「危機管理としての防災」、十二月九日神戸大・渥美公秀「偏見の集合的基盤」、十一月十六日京大・河崎 靖「ことばの多様性—その理解に向けて」、が予定され、さらに一月十三日と一月二十日(講演者未定)にも開催される。

関連分野の研究者、学生来聴歓迎。問い合わせは杉万(電075-753-6564)または北山(075-753-6557)まで。

◎ニュース編集部に届いた各地の研究会活動を紹介しました。

学会には地域別合評会の補助予算が計上されています。連絡費等に活用してください。(問い合わせは事務局まで)

【編集後記】

\*あつという間に秋が過ぎ去り、鍋物の美味しい季節になりました。気が付けばもう師走。今回も発行が遅れてしまいました。補助的な仕事しかしていない私ですが、「ぐるだニュース」の編集もこれが最後かと思うと、長かったような、短かったような。(桐)

\*村山さんが消費税率を上げたことと、新執行部が学会会費値上げを提案したこととは単なるめぐり合わせに杉万せん。

「不惜身命」とまでは申しませんが、ご苦勞さまで。

\*本号原稿を印刷屋に手渡す直前、フロッピー・コピーを逆にして五頁までを完全消去するという、掉尾を飾る大ちゃんばをやらかしました。発効遅延の言い訳すなわち編集後記、との条件づけ完成。

\*次号から編集部が東広島から札幌に移ります。読者のみなさん、大坊編集長に益々のご協力をお願いします。(黒)